真里谷城（まうやつ）

（木更津市）

戦国時代に上総国に侵入した甲斐（山梨県）の武田信長（武田信玄の五代前の先祖）が庁南城（夷隅郡長南町所在）とともに上総地方を支配するために築いたもので、この地方の中心になった山城と言われています。現在、真里谷城址は、少年自然の家キャンプ場内にあります。

蔵波城（くらなみ）

（袖ケ浦市）

近接の久保田城とともに椎津城の支城だったともいわれ、後に里見氏の城として対北条氏の前線基地の役割を持っていました。椎津から木更津に通じる海岸沿いの街道を押え、北側には長南、真里谷に通じるルートが存在する重要な地。そのため、蔵波周辺は、上総武田氏、千葉氏、小田原北条氏、里見氏の抗争の舞台となりました。

佐貫城（さぬき）

（富津市）

真里谷武田氏が築城し、里見氏との戦いの舞台にもなった城。里見義弘の居城となってからも拡幅・整備され、その名残を残しています。江戸時代に一度廃城となりましたが阿部氏が再興し、当時修築した大手門跡の姿などもうかがえます。

造海城（つくろうみ）

（富津市）

東京湾沿岸の要害の地に築かれた城。燈籠坂大師堂の裏山を大手口とし、当時の縄張りを残しています。対岸の相模国を臨み、里見水軍の根拠地として、北条氏との間での海上防衛の要衝として重要な役割を担ったとされています。

真武根陣屋（まぶねじんや）

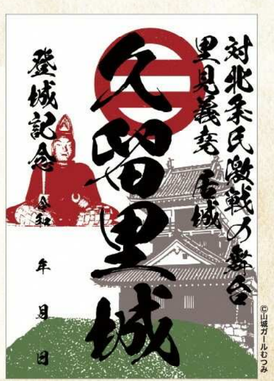
（木更津市）

徳川幕府の譜代大名であった二代藩主の林忠旭が、嘉永三年（1850）に造営した請西藩の陣屋。藩主及び重臣の詰所として使用されました。慶応4年（1868）四代藩主の林忠崇は、戊辰戦争において新政府軍との転戦の後、仙台にて降伏。この出陣の際、自ら火を放ち焼失。現在は、南半分の一部に土塁等を残すのみとなりました。

久留里城（くるう）

（君津市）

戦国時代に里見義堯が本拠点とし、1560年には北条軍に包囲されるも長尾景虎（上杉謙信）に援軍を頼み、窮地を脱しました。1574年に義堯が城内で死去すると城の勢力は衰退し、徳川家康の関東入部以降は大須賀氏、土屋氏、黒田氏が入り、近世城郭として整備され、幕末まで存続しました。

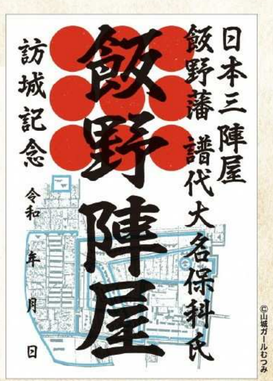


金谷城（かなや）

（富津市）

鋸山から伸びる丘陵上に築かれた城であり、安房国と上総国の境界に位置する要衝の地。四脚門を伴う虎口の跡や掘立柱建物跡などが検出されています。正木氏の拠点として機能し、上総を巡る里見氏と北条氏の争いの舞台ともなりました。

飯野陣屋（いいのじんや）

（富津市）

慶安元年（1648）に保科正貞によって築造された広大な陣屋です。明治維新後に廃絶されましたが、現在も周囲に水濠がめぐり、本丸・二の丸・三の丸の跡を遺しています。越前敦賀・長州徳山とともに、日本三陣屋のひとつに数えられています。